

高等学校英語学習における 主体性を促す自己評価の比較分析

学籍番号 229302

氏 名 石松千紗

主指導教員 箱崎雄子

副指導教員 瓜生彩子

1. 背景と目的

日本の学校教育において、「主体性」は重要視されてきた概念であり、学習指導要領でも「主体的に学習に取り組む態度」が学習評価の観点の一つとして定められた。本研究では「主体性」を「生徒が自身の現状や課題を認知し、自らの学習方略を決定しながら自己調整的に学習に取り組む姿勢」と定義づけ、それを促すための手法として「自己評価」に着目した。授業後に記述する「振り返りシート」は多くの教員が採用している最も一般的な自己評価の一つであるが、授業の中で十分な時間を確保することが難しいこと、教員の負担の増大等の理由から効果的、持続的に行うことに課題があると考えた。

そのような背景から、学校現場で自己調整学習 (Self-Regulated Learning) につながる「主体性」を促す自己評価の在り方について検討することを目的とし、本研究のテーマを設定した。頻度と内容の観点から2種類の自己評価活動を行い、比較することにより、実現可能な自己評価の在り方について考察した。

2. 研究方法

本研究は公立A高等学校第2学年の生徒80人(2学級)を対象に、英語コミュニケーションⅡの授業における1単元(6時間)の授業実践の中で行った。自己評価の方法として、内容と頻度の異なる2種類の振り返りシートをそれぞれの学級で実践し、単元前後のアンケート調査を用いて比較することとした。比較内容は、1単元の教科書内容に沿って学習を進めながら、毎授業後に授業内容についての振り返りシートを記入する学級と、2回に1回の頻度で教科書内容を復習する小テストを行った後に、その結果を踏まえた記入する学級である。

また、毎授業後に自己評価をさせる学級は、授業内容について「わかったこと、わからなかったこと」について記入させ、2回に1回の学級では、小テストを通して自身の理解度を客観的に理解し、「できたこと、できなかったこと」について記入させた。それらに加えて、両組で、今後さらに理解を深めるために必要な学習や教材についても記入させた。どちらの活動にも共通していることは、自己調整学習の「予見」段階に焦点を当てた内容であるということであり、生徒が自身の課題や成果を認知し、今後の学習方略を設定することができるよう発問を設定している。

その他、生徒それぞれが自身の課題分析を行うことを目的とし、単元開始前に診断テストも

行った。さらに、学習者が自身の課題を理解し、学習方略の決定づけをした後に、自己調整学習の「遂行」の段階にサイクルを促す手助けとなるよう、「復習クイズ」として授業後に e-learning 教材を配信した。

3. 調査結果と考察

3.1 小テストを用いた自己評価がもたらす学習効果

それぞれの事後アンケートの回答を比較した中で、2 回に 1 回の小テスト後に自己評価を行った組では、2 つの学習効果が認められた。一つ目は、英語学習により集中して取り組めるようになったこと ($p=.044$)、二つ目は、自身の英語学習がより成果を上げていると実感できたこと ($p=.059$) である。自身の理解度を可視化できる小テストを用いて振り返りを行っていたため、英語学習の成果としてより実感しやすく、学習内容への深い関与や自己効力感の向上も期待できることがわかった。

3.2 毎授業後の自己評価がもたらす学習効果

毎授業後に自己評価を行った組では、3 つの学習効果が確認された。一つ目は、「英語の文法力に自信がありますか。」の回答結果に対して ($p=.065$) 有意な傾向が見られたことである。二つ目は、自己評価の内容をより意欲的に活用しようとしていること ($p=.099$)、そして三つめは英語学習の時間が増加したことである ($p=.082$)。毎授業後に振り返り活動を行うことで、学習において上手くいったことや復習が必要な点をより明確に、具体的に認識でき、さらに振り返りシートに記述してアウトプットすることで学びの定着にもつながっていることがわかった。

3.3 継続的な活用可能性と主体性の限界

本研究を通して自己評価がもたらす学習効果については明らかになったものの、大きく 2 つの課題が挙げられた。第一に、実現可能な範囲で最大限の効果をもたらすための方法についてはさらなる研究が必要となることである。教員にとっても長期にわたって継続的に実現可能であるのかどうかを正確に判断するため、自己評価で活用した振り返りシートを作成するにあたり、ICT を活用してより簡単に行ったり、生徒間や教員間で共有したりすることでより効果的な学習評価を提供できる可能性についても検討したい。

第二に、本研究における「主体性」の限界である。A 高等学校で展開されている英語の授業は大学入学試験を前提としたものが多く、生徒への動機付けに大きな影響を与えている。そのような環境下において、本研究での「主体性」は、国際交流活動や言語活動などを通して育まれる、内発的動機付けを伴うものとは同一視できないのではないかという疑問が残った。そのため、学習者が自身の興味・関心や自己実現への過程を踏まえて学習に取り組むことができるような工夫も取り入れていくことが必要となる。